

# 一般的因果律志向性尺度の作成と妥当性の検討\*

田中 秀明\*\*・桜井 茂男\*\*\*

(広島大学大学院) (心理学教室)

**要旨：**Deci & Ryan (1985b) が開発した一般的因果律志向性尺度 (General Causality Orientations Scale: GCOS) の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。GCOS は成人を対象にして、安定した特性としての自律志向性、コントロール志向性、動機づけ喪失志向性を測ることができる。今回は大学生を対象に GCOS 日本語版を実施した結果、内的一貫性 ( $\alpha = .65 \sim .76$ )、1 か月後の再テスト法による信頼性係数 (.71 ~ .73) とも比較的高かった。また種々の尺度との相関による妥当性の検討もほぼ予測通りであった。

**キーワード：**因果律志向性 自律志向性 コントロール志向性 動機づけ喪失志向性

deCharms (1968) は、「人間は自分の行動の起源をなす存在でありたいという欲求を持つ (中略) 人間は自分自身が自分の行動の原因であると認知するとき内発的に動機づけられていると考える」と述べた。そして彼は、Heider (1958) の「因果律」という概念を用いて、自分が行動の原因であることを「内的因果律」と呼びこのとき内発的に動機づけられ、自分の外部に行動の原因があることを「外的因果律」と呼びこのとき外発的に動機づけられると考えた。

Deci (1975, 1980) は内発的動機づけの鍵概念として「因果律」を用い、deCharms と同様にその所在によって内発的動機づけと外発的動機づけをわけた。さらに彼は「因果律」の個人差に焦点をあて、パーソナリティ特性の観点から動機づけ様式の類型化を試みた。それが「因果律志向性 (causality orientation)」である。因果律志向性は 3 つに類型化される。それらは自律志向性 (autonomy orientation)、コントロール志向性 (control orientation)、動機づけ喪失志向性 (impersonal orientation) で、順に内発的に動機づけられやすい傾向、外発的に動機づけられやすい傾向、動機づけが生じにくい傾向と言い替えることができる。

Deci & Ryan (1985b) はこのような因果律志向性を測定する尺度 (General Causality Orientations Scale: GCOS) を開発した。この尺度はある状況 (転職、試験、ピクニックの計画依頼など) を示す短文の後に、それに対する 3 通りの行動や考えが提示され、それぞれについて自分がどの程度当てはまるかを自己評価をするものである。3 通りの行動や考えとは既述の自律志向性、コントロール志向性、動機づけ喪失志向性を表現したものであり、これらを評価することによって

---

\* Construction of the Japanese Version of the General Causality Orientations Scale.

\*\* Hideaki TANAKA (Graduate School of Hiroshima University, Hiroshima)

\*\*\* Shigeo SAKURAI (Department of Psychology, Nara University of Education, Nara)

動機づけ様式の個人差を査定することが可能となる。彼らは予備調査を経て12の短文と36の志向性項目からなる尺度を決定した。

ところで本邦では、このような有用な尺度はいまだ開発されていない。本研究では、Deci & Ryan (1985b) が開発した尺度 (GCOS) の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。妥当性については、3つの志向性と種々の構成概念との関係から検討する。妥当性の検討のために用いられる尺度は、Deci & Ryan (1985b) で使用された5つの尺度 (自尊感情、Locus of Control、タイプ A 行動、公的自己意識、抑うつ傾向) と内容的に同じである。

自尊感情は、有能感と近い概念であり、自律志向性とは正の相関、動機づけ喪失志向性とは負の相関が予測される。Locus of Control は「強化が統制可能か、不可能か」および「自己決定した方が良い結果を生むと考えるか、成行きに任せた方が良い結果を生むと考えるか」という点が概念構成の中核であるから、自律志向性と内的統制が正の相関、コントロール志向性ならびに動機づけ喪失志向性は負の相関が予測される。タイプ A は競争心・攻撃性・過度の活動性などによって特徴づけられるパーソナリティ特性であり、公的自己意識は自己の社会的側面に注意を向けやすい傾向である。これら2つは外的報酬を得ることに固執するコントロール志向性と正の相関が予測される。また、抑うつ傾向は動機づけ喪失志向性と正の相関が予測される。

## 方 法

**被調査者** 大学生309名 (男子118名、女子191名) を尺度構成の被調査者とした。そのうちの何名か (表4 参照) には本尺度の妥当性を検討するために他の質問紙もあわせて実施した。また、39名には約1か月後の再テストに参加してもらった。

**測定尺度** 一般的因果律志向性尺度 (GCOS) : Deci & Ryan (1985b) の尺度を日本語訳して用いた。本尺度はある状況を提示する短文の後に、自律志向性、コントロール志向性、動機づけ喪失志向性を示す行動 (考え) を表現した項目があり、それらがどの程度自分に当てはまるかを4件法で評定をする尺度である。得点化は「よく当てはまる」を4点、「かなり当てはまる」を3点、「少し当てはまる」を2点、「全く当てはまらない」を1点とした。状況文は転職、テスト、計画の依頼など多岐にわたっており合計12の短文からなる。したがって各志向性を問う項目も合計12となり、可能な得点範囲は12点～48点である。質問紙の例を表1に示した。

また、3つの因果律志向性と種々の構成概念との関係を検討するために、つぎの①～⑤の質問紙を用いた。

①自尊感情尺度：星野 (1970) による Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の日本語版を一部修正して用いた (詳細については別の機会に発表の予定)。尺度は10項目で構成されており、各項目は1点～4点までの4段階評定である。

②Locus of Control 尺度：鎌原・樋口・清水 (1982) の尺度を用いた。18項目で構成されており、各項目は1点～6点までの6段階評定である。内的統制方向へ得点化した。

③タイプ A 行動尺度：桜井・桜井 (1989) の尺度を用いた。尺度は16項目で構成されており、各項目は1点～6点までの6段階評定である。

表 1 GCOS 日本語版の項目例と採点法

1～12の下線の文章を1つずつよく読んで、そのような状況が、あなたに起こったと仮定してください。そして、①～③の行動（考え）が、あなたにどの程度当てはまるか、右下の表にそって当てはまる数字に○をしてください。正しい答えとか、間違った答えとかはありませんから、思った通りに答えてください。

1 ……全く当てはまらない
2 ……少し当てはまる
3 ……かなり当てはまる
4 ……よく当てはまる

1. あなたはしばらく勤めていた会社で、新しいポストへの異動が決まりました。  
あなたは最初に、どんなことを考えたり、思ったりしますか。

- ①新しいポストでその責務がはたせなかったらどうし [1 — 2 — 3 — 4]  
よう、と不安になる。(I)
- ②新しいポストで、今よりも良い仕事ができるかどうか [1 — 2 — 3 — 4]  
かと考える。(C)
- ③新しい仕事が、自分にとって興味深いものかどうか、 [1 — 2 — 3 — 4]  
知りたくなる。(A)

注) ①～③の文章の最後についている (A), (C), (I) は次の意味である。

(A)：自律志向性、(C)：コントロール志向性、(I)：動機づけ喪失志向性

採点は、1～4の数字がそのまま得点になる。

④公的自己意識尺度：諸井（1985）による Fenigstein, Scheier, & Buss (1975) の自己意識尺度の日本語版のうちから公的自己意識を測定する項目を使用した。尺度は7項目で構成されており、各項目は1点～6点までの6段階評定である。

⑤抑うつ傾向尺度：福田・小林（1973）による Zung（1965）の抑うつ傾向尺度の日本版を用いた。尺度は20項目で構成されており、各項目は1点～4点までの4段階評定である。

なお、①～⑤の尺度項目は「はい」から「いいえ」までの多段階で評定されており、各尺度の得点が高くなるほどその特性が高いことを意味する。

**手続き** 上記の質問紙を平成4年5月下旬から10月上旬にかけて、授業時間の最後に学生の協力を求め集団形式で実施した。

## 結 果

各志向性の項目平均ならびに標準偏差の範囲が表2に示されている。また、各志向性（12項目の合計）の平均と標準偏差は表3に示されている。各志向性の性差を検討したところ、表3に示されているように自律志向性で男子よりも女子の方が有意に高かった ( $t(307)=4.40, p<.01$ )。

3つの志向性間の相関係数は、自律志向性とコントロール志向性が.36 ( $p<.01$ )、コントロール志向性と動機づけ喪失志向性が.33 ( $p<.01$ ) と有意な相関がみられ、自律志向性と動機づけ

表2 各志向性（各12項目）の基礎統計

志向性	M	SD	相 関	$\alpha$ 係数	再テスト
自 律	2.65~3.59	0.60~0.88	.45~.59	.76	.73
コントロール	1.57~2.86	0.73~1.02	.36~.58	.65	.72
動機づけ喪失	1.39~2.68	0.60~0.93	.34~.64	.65	.71

注) 相関とは項目－全体相関係数である。再テストは1か月後。 $n=309$ 。

表3 全体および男女の平均得点、標準偏差と性差

	因果律志向性		
	自 律	コントロール	動機づけ喪失
全 体 ( $n=309$ )			
M	37.28	27.42	24.62
SD	4.98	4.55	4.51
男 子 ( $n=118$ )			
M	35.74	26.84	24.13
SD	5.19	4.60	4.82
女 子 ( $n=191$ )			
M	38.23	27.78	24.93
SD	4.58	4.47	4.26
性 差 ( $t$ 値)	4.40**	1.77	1.52

注) \*\* $p<.01$

喪失志向性とは.05とほぼ無相関であった。Deci & Ryan (1985b) ではそれぞれ順に、.03, .27 ( $p<.01$ ),  $-.25$  ( $p<.01$ ) という結果であり、3つの志向性の関係（位置づけ）は異なっている（図1参照）。

本尺度の信頼性を検討するために、項目－全体相関、 $\alpha$  係数（内的一貫性）および1か月後の再テストによる信頼性係数が算出された。その結果は表2に示されている。項目－全体相関係数についてはどの志向性においてもすべての項目に1%水準で有意な相関がみられた。また、 $\alpha$  係数も再テスト法 ( $n=39$ ) による信頼性係数も比較的高かった。したがって因果律志向性尺度の信頼性は認められたものと判断できる。

つぎに本尺度の妥当性を検討するために、各志向性と種々の構成概念との相関をみた。既述のように3つの志向性間に有意な相関がみられたため、他の2つの志向性をコントロールした偏相関係数で求めた（表4参照）。表4にはDeci & Ryan (1985b) の結果も示されている。なお、分析の対象となる各下位尺度の $\alpha$  係数は.77~.83の範囲にあり、信頼性（内的一貫性）は確認されている。

自律志向性はLocus of Control（内的統制）と正の相関がみられた。しかし、自尊感情とはDeci & Ryan (1985b) の結果と異なり無相関であった。コントロール志向性はタイプA行動、

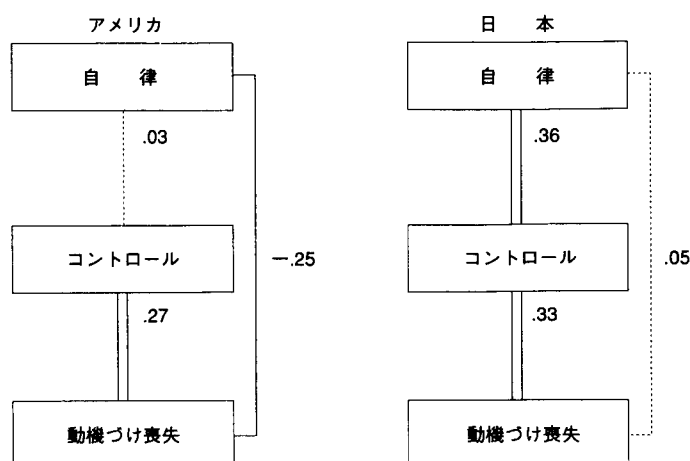


図1 アメリカとわが国における3つの志向性の関係の比較

注) 図中の数値は相関係数である。

表4 種々の構成概念との関係 (偏相関係数)

尺度 (人数)	因果律志向性		
	自律	コントロール	動機づけ喪失
自尊感情 (n=89)	-.01 ( .35** )	.13 ( .01 )	-.25* ( -.61** )
Locus of Control (n=63)	.33** ( .16 )	-.29* ( -.29** )	-.28* ( -.52** )
タイプA行動 (n=86)	.08 ( .16 )	.27* ( .26* )	-.27* ( .00 )
公的自己意識 (n=89)	-.06 ( .11 )	.25* ( .22* )	-.02 ( .41** )
抑うつ傾向 (n=131)	-.09 ( -.12 )	-.10 ( .09 )	.31** ( .28** )

注) ( ) 内の単純相関係数は、Deci & Ryan (1985b) の結果である。n=70~80。

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ .

公的自己意識と正の相関が、Locus of Control (内的統制) と負の相関がみられた。動機づけ喪失志向性は抑うつ傾向と正の相関が、自尊感情、Locus of Control (内的統制)、タイプA行動と負の相関がみられた。

## 考 察

本研究の目的は、Deci & Ryan (1985b) が開発した一般的因果律志向性尺度 (GCOS) を翻訳し、日本語版尺度を作成することであった。まず信頼性については、項目-全体相関、 $\alpha$ 係数、再テスト法による信頼性係数で検討された (表2 参照)。 $\alpha$ 係数については Deci & Ryan (1985b) でも算出されており、そこでは自律志向性が.74、コントロール志向性が.69、動機づけ喪失志向性が.74であった。今回の結果は多少これらより劣るが値自体は比較的高いものであり、項目-

全体相関および再テスト法の結果と合わせれば満足のものと言えよう。

つぎに妥当性については志向性別に関連する諸概念との関係をみた。まず自律志向性は Locus of Control (内的統制) と正の相関が認められ予測と合致した。本研究の比較対象となる Deci & Ryan (1985b) では、この志向性は自尊感情と有意な正の相関関係 (.35) にあることが主たる結果であった。しかし本研究では認められなかった。この点については今後の詳細な検討が必要であろう。

コントロール志向性はタイプ A 行動、公的自己意識と正の相関が認められ、Locus of Control (内的統制) と負の相関が認められた。これらはすべて Deci & Ryan (1985b) でも認められており、予測と合致した結果であるといえよう。コントロール志向性が優勢な人は、自己決定的ではなく、関心事である成功となる証や報酬を得るためにタイプ A 行動をし、公的な自己意識を働かせることが強いと考えられる。

最後に動機づけ喪失志向性であるが、これは抑うつ傾向と正の相関が認められ、自尊感情、Locus of Control (内的統制)、タイプ A 行動とに負の相関が認められた。Deci & Ryan (1985b) でも抑うつ傾向、自尊感情、Locus of Control に有意な相関が見いだされており、この志向性についてはほぼ予測が支持された。これらの結果より動機づけ喪失志向性の優勢な人は、ネガティブな自己概念を抱き、無気力で動機づけのエネルギーはほとんど枯渇した状態にあることが理解できる。なお、タイプ A 行動については、彼らの結果では無相関であった。しかし、タイプ A 行動が過度の活動性によって特徴づけられる特性であることを考えれば、無気力であるこの志向性と負の相関関係にあることはありうべき結果と解釈できる。

以上のことから本尺度の妥当性についてはほぼ認められたと考える。ただ本研究での妥当性の検討が自己報告型の質問紙との相関のみであることから、Deci & Ryan (1985b) が行ったような情動や態度との関係、あるいは実際の行動との関係からも検討する必要がある。

また3つの因果律志向性の関係(位置づけ)は Deci & Ryan (1985b) が調査を行ったアメリカとわが国ではやや異なっていることが明らかとなった(図1参照)。彼らの結果では、自律志向性とコントロール志向性は独立したものであり、動機づけ喪失志向性はコントロール志向性と幾分関係があり自律志向性とは対照的な関係であった。これに対し、今回のわが国の結果(自律志向性とコントロール志向性、およびコントロール志向性と動機づけ喪失志向性とに有意な正の相関、自律志向性と動機づけ喪失志向性とが無相関)では、この三者はコントロール志向性を中心とした包含関係になっている。自律志向性とコントロール志向性との関係が、両国の違いを如実に表していると思われる。これらのことは、両国間の文化差を考える上で興味深い知見である。さらなる研究の蓄積によって検討していきたい。

最後に各志向性における性差であるが、自律志向性において男性よりも女性の方が有意に高かった。Deci & Ryan (1985b) でも同じ結果 ( $t=5.51, p<.01$ ) が得られており、女性は自律志向性の強いことが示された。しかし、Deci & Ryan (1985b) ではコントロール志向性において、今度は女性よりも男性の方が有意に高い ( $t=3.89, p<.01$ ) という結果も得られている。今回の調査では認められなかった。3つの志向性とその性差が比較的クリアに類型化されるアメリカ

に対して、そうではないわが国。これも両国間の違いの一つといえそうである。

欧米では本尺度を用いて、コントロール志向性と状況に応じて行動を調整する特性であるセルフ・モニタリングとの関係を見いだした研究 (Zuckerman, Gioioso, & Tellini, 1988) や自律志向性を調整変数 (moderator) として個人特性とその行動間の一貫性を検討した研究 (Koestner, Bernieri, & Zuckerman, 1992) などがでてきている。今後は本尺度を用いてこういった方面の研究も始め、尺度の有効性をさらに示していきたいと考えている。

## 引用文献

- Beck, A. T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. 1974 The Measurement of pessimism : The hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 861-865.
- deCharms, R. 1968 *Personal causation: The internal affective determinants of behavior*. New York : Academic Press.
- Deci, E. L. 1971 Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **18**, 105-115.
- Deci, E. L. 1975 *Intrinsic motivation*. New York: Plenum Press. 安藤延男・石田梅男 (訳) 1980 内発的動機づけ—実験社会心理学的アプローチ 誠信書房.
- Deci, E. L. 1980 *The psychology of self-determination*. Lexington, MA: Heath (Lexington Books). 石田梅男 (訳) 1985 自己決定の心理学 誠信書房.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. 1985a *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. 1985b The general causality orientations scale: Self-determination in personality. *Journal of Research in Personality*, **19**, 109-134.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- 福田一彦・小林茂雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経雑誌, **75**, 673-679.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. 大橋正夫 (訳) 1978 対人関係の心理学 誠信書房.
- 星野命 1970 感情の心理と教育(二) 児童心理, **24**, 1445-1477.
- 鎌原雅彦・樋口一彦・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 302-307.
- Koestner, R., Bernieri, F., & Zuckerman, M. 1992 Self-regulation and consistency between attitudes, traits, and behaviors. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 52-59.
- 諸井克英 1985 高校生における孤独感と自己意識 心理学研究, **56**, 237-240.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton Univ. Press.
- 桜井茂男・桜井登世子 1989 タイプ A 行動における親子の関係—大学生を対象にして— 日本心理学会第53回大会発表論文集, 179.

- Seligman, M. E. P. 1975 *Helplessness: On depression, development, and death*. San Francisco: Freeman. 平井久・木村駿（監訳）1985 うつ病の行動学—学習性絶望感とは何か 誠信書房.
- Zuckerman, M., Gioioso, C., & Tellini, S. 1988 Control orientation, self-monitoring, and preference for image versus quality approach to advertising. *Journal of Research in Personality*, **22**, 89-100.
- Zung, W. W. K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **13**, 508-515.

<付記>本尺度が必要な方は、第一著者までお問い合わせください。